

レギーネとキエルケゴール—その関係の再考察

森田美芽

序

本論文が目指すのは、キエルケゴールとレギーネとの関わりを再検討すること、それを通じてキエルケゴールの思想と作家性の関わりの本質に迫り、彼の著作活動の意味を再検討することである。私たちはキエルケゴールの著作を通じて彼のレギーネ像、彼自身がこう見せようとする人物像にコントロールされてきたのではないか。また、美化された「永遠の恋人」との関係の中に、もう一度、彼自身の人生の実像と著作活動の関連を見直すことはできないだろうか。

そのために、まず主として日記叙述^{•1}におけるキエルケゴールのレギーネ像の構成を検討し、次にレギーネの視点からの検討を行い、彼が問題とした宗教性の内実を再検討することで、キエルケゴール理解の新たな視点を見出したい。

1. キエルケゴールのレギーネへの思いはストーカー的だった？

キエルケゴールの日記は、自分の感情や思いをある程度整理し、読者にある印象を与えるために書かれたものであると理解する方が妥当である。彼は死後自分の日記が公開されることをすでに意識して書いていた。いわば、彼自身の理想とした関係を描こうとしていたのである。そしてそこには、明白に、レギーネだけを愛しその愛に殉じたという物語を作り出そうという意図

^{•1} キエルケゴールの日記の引用は、Howard V. Hong and Edna H. Hong (eds.), *Søren Kierkegaard's Journals and Papers*, Indiana University Press, 1967-75 に基づき当該番号を随時（）で記す。

が見て取れる²。このように日記の意図的な編集を認めたうえで、橋本淳氏は、キエルケゴールの一目惚れ説も否定する³。そして橋本氏は、そこにレギーネとの愛を生涯一つの物とし、「愛の物語を永遠の詩とさせつつ、そこに世界史的意義をおわせようとする思惑が想像されてならない」⁴と述べている。

さらに彼は、婚約時代の記録は一切残していない。今日我々が、彼の婚約時代の記録として見ているのは、主として彼が婚約破棄から 10 年以上経過した 1849 年の「彼女に対する私の関係」という彼の文章である。(X 1 A667 参照)

第二に、こうした日誌において、彼のレギーネに対する思いには、はつきりと二重性という特徴が見られる。それは、たとえば、レギーネの愛らしさと美しさへの賛嘆、憧れに似た感情と共に、もう一方で彼女を庇護し、彼女を導こうとする父性的傾向として現われる。また彼女に対し理解されたいが思うように理解されないという嘆き、苦しみながらも彼女に代わって苦しみを受けることをよしとする代理の意識などがある。そしてそれらを繰り返しながら、自分の愛を「不幸な愛」と意味づけている。さらに彼は、最終的に彼女を断念したことが地上における自分の宗教的使命、宗教的理由に基づくことで正当化していく、という流れである。

1841 年から 43 年ごろにかけて、彼は自分の感情を繰り返し語っている。それはレギーネに対し、自分を欺瞞者と見せようとする苦しい思いの吐露であったり、彼女のイメージを追うものであったり、また彼女が自分を理解してくれないことへの嘆きであったりする。

ここでは、誤解の悲しみ、苦痛、彼女が悲しんでいることへの同情、しか

² まず、彼の「日記」1837 年 5 月 8 日から 16 日の記述 (II A67 68) を愛の始まりの記念碑とする解釈は、ラファエルマイヤーが 1904 年版の〔文書〕で定説化したものである。これには後にブリックスの反論がなされて以来、愛の伝説には疑問が持たれている。橋本淳訳『セーレン・キエルケゴールの日誌』(以下「日誌」) 第 1 卷訳注 235 - 6 頁参照(未来社、1985 年)

³ 橋本淳『逍遙する哲学者』88 - 9 頁(新教出版社、1979 年)

⁴ 同書 89 頁

し自分の嘆きはもっと深いという自負や、自分を悪党と思わせ、彼女を突き放すことの真意が述べられている。

たとえばその葛藤は、1841年の「彼女は、私が彼女を軽やかにし、思想の大膽さを与えたことを、彼女が水の上に歩くようにしたのが私の信仰であること、私がそれを私が贈ったのに彼女が受け取るのを忘れた」(III A 133)や、1843年の「もし彼女が私のこの数年間の苦しみを知ってさえいたら。彼女は決して何も発見しなかった。しかしその時、私の見通しは速やかにかわった。結婚式で私は誓わねばならない—そして私は何も隠さなかった。他方、私は彼女にいえないことがあった。聖なるものが結婚に入ってくるという事実が私の破滅だ。私はもし彼女と結婚しないなら、彼女を怒らせただろう。もし非倫理的関係が正当なら——明日には始まる。・・・彼女は私に絶対的に依存できた。でもそれは不幸な実存だ。」(IV A 133)という記述に現れている。こうした述懐は、自分自身の不幸を強調し、自己憐憫に酔っているように見える。

また、彼がレギーネを賞賛するのは、次のような調子である。

「彼女の思い上がりでさえ、献身に変わった。彼女は愛らしい子ども、愛すべき性質を持った子供であり・・最初に会ったとき、なんと愛らしかったことだろう。本当に愛らしく、献身においても、感動的で、悲しみの中でも明白に印象的で、別れの最後の瞬間にも、高慢さはあったが、初めから終わりまで、小さい賢い頭をしていたが、彼女はいつも永遠の贊美にふさわしいものを見つけられた。沈黙と内面性。そして彼女が願うときは、岩でも動かせるような面立ちという力があった。彼女を見ることだけで幸せだった。」(X 5A 150)

だが、レギーネの美しさ、愛らしさへのこうした賛嘆は、彼女を自由にするものではない。キエルケゴールにとって、レギーネはどこまでも、「小さいレギーネ」「愛らしいレギーネ」であり、自分の庇護と指導のうちに留まるべきもの、と意識される。また、彼の婚約期間に関する弁明や自分自身の定義を見ると、レギーネが自分の思い通りにならないことへの苛立ちや支配

欲が潜んでいるように思われる。

より正確には、彼はレギーネを支配しようとしているといえる。彼が婚約破棄後10年以上たっても、変わらず怒りを抱いているのは、レギーネが婚約時代にある種の傲慢さを示したことと、婚約破棄の後、2年ほどでスレーゲルと婚約したことである。

前者についてはこう語っている。

「しかし大切なのは、翌日、私は間違いを犯したとわかった。私は悔悟した。Vita ante acto. 私の憂鬱、それで十分だった。

そのことで私は描きつくせないほど苦しんだ。彼女は何も気づかないようだった。反対に、彼女は生意気にも、同情から受けたのだとさえ言った——そう、こんな生意気を知らなかった。こうして危機に陥った。」(X 5A 149)

「そう、しかし彼女の敬虔な哀願を誤って使ったことで、私に対し大きな責任を負っている。ある意味で彼女の責任というのは、私に対しそんなにも謙った仕方で決心しておいて、その後絶望のあまり無思慮となって、問題をひどくさせてしまったことである。けれども彼女の責任が初めて本質的に明瞭となるのは、ほとぼりも冷めないうちに婚約したことによってである。」(1849年11月、「彼女に対する私の関係」X 2A 216より)

「将来にわたって彼女が安心できるような何かを彼女のためにしてやるつもりでいても、それができたとしても、そのとき世間は、まったく私を誤解し、単に関係の回復を図る手段としてしか受け取らないかもしれない。

私自身は喜んで他人の誤解に身をさらすつもりでいても、その状況では、実際に彼女としては拒むほかはないであろう。

確かに、その通りであろう。咎もないのに彼女は苦しんできた。その涙が私の心を揺さぶった。だから彼女を喜ばせるものなら何でもし

てやりたい。けれども、真実と真剣さがなくてはならないときに、どうしても彼女にもとめたい一事をゆるしてほしい。あの全体が1年か1年半しか経過しないのに、新しい婚約が成立した、あのときの行為に対して、なんとしても厳しい譴責を彼女が甘受するように、と。」(X 4A 544「彼女について」)

それは一面、彼がレギーネに対等の自己主張を許さなかったこと、レギーネが他の男性のものになることへの嫉妬の感情があるともいえるが、それだけではない。前者について、キエルケゴールが彼女に、「献身をもって戦いなさい。あなたの自尊心がいけない」(X 5A 149)と言ったことでレギーネは驚くほど献身的に彼に向かったという。しかし彼がレギーネの献身を喜びつつ、実は恐れを感じていたことが示されている箇所がある。

「ある意味で女の本性は本当に恐ろしい。私が恐れるのは、献身という形である。というのも、それは私の本性とまったく相反するからである。女らしい——配慮を欠く、女性的な献身が恐ろしいのである。なぜなら、その女らしさは、ある意味で（相手に寄せる）気持ちと力強く結び合っているからである。だからもしそれが粉碎されるとき——そして相手の者が、憂愁な空想力を持ち重苦しい宗教的な荷を負う弁証家であるとき、真実恐ろしいことである。」(*ibid.*)

彼はレギーネが自分に純粹に献身することを要求しながら、それを喜ぶことができない。その故に責任を増すことになり、結果として彼女を傷つける形で婚約破棄しなければならなかったと告白している。しかし要求したことと反対のことを要求されれば、レギーネはダブルバインドに陥る。そもそもキエルケゴールがレギーネを愛したのも、レギーネの善良な愛らしさであり、そうした彼の憂愁や屈折と正反対のものだからである。にもかかわらず、ここでは逆のことが要求されている。レギーネが彼の命に忠実であろうとするとそれを突き放すという矛盾。ここに彼の複雑な心理的屈折のあとを見ることもできよう。

キエルケゴールは幸福になりたいと願いつつ、その幸福が自らに可能になった途端、それを否定するという矛盾を生きた。その結果として、彼は苦しみや悔いという感情を自らの友とした。彼女を苦しめたことへの悔い、彼女に代わって苦しみを受けているという代理の感情、自分自身の使命への思いなどがあるが、不思議にも彼女と共におることの喜び、彼女から学んだこと、彼女との出会いによって新たな実存の段階を経験したとは書かれていません。彼女の代わりに自分が苦しみを受けることをよしとする意識がある。「私がこんなふうに不幸と思っているなら、それは私の慰めだ—彼女が苦しんでいないことが。」(III A 163) 彼はそれを日々の苦しみ、と呼んでいる。

この矛盾は、彼が自分の愛を「不幸な愛」と呼ぶことの秘密である。

「私の彼女への関係は、真実不幸な愛と呼ばれうる——私は彼女を愛し、彼女は私のものであり、彼女の唯一の望みは一緒にいることだが——家族は私に懇願したが、——それは私の第一の願いだった——それにノーと言わなければならない。彼女を楽にさせるため、私は彼女に、私が全くの欺瞞者であると信じさせるようにしよう。」(III A 161)

しかしこうした「不幸」をレギーネと分かち合い、共に生きることが彼にはどうしてもできなかった。ここで彼の愛は自己閉鎖的なものとなってしまう。結局、彼の情熱は、少なくともこの点では、現代のストーカーと呼ばれる人々の情熱ときわめて類似した、自己完結的で自己中心的なものとならざるを得なかつたといえるだろう。

2. キエルケゴールはレギーネへの遂げられない思いのゆえに、彼女を「永遠の恋人」とし、「歴史に伴っていく」ことで彼女への復讐をとげたのではないか？

こうした彼のレギーネへの思いは、1847年11月3日のレギーネの結婚、そしてもう一つの決定的な別離によってさらに強められる。

1849年6月25日、彼の婚約破棄に強く憤っていたレギーネの父が死亡した。その直後、彼は1849年8月24日付けの文章「彼女に対する私の関係」を、またはそれと相前後して自身による婚約期間中の総決算の文章を残している。そこでは彼が婚約の当初からそれを悔いたこと、レギーネが一度非常に傲慢な態度を示したことに対する怒り、彼女に献身を命じると彼女はそれに従ったこと、しかしそのためには彼女への責任が増大し、婚約破棄を決意したこと、また彼女のプライドを守るために彼女を突き放し、悪人を装ったことが書かれている。そしてレギーネの父の死を機に、彼はレギーネと再び「兄と妹のような関係」を築くことができるのではないかと期待した。

彼はレギーネに和解を求める手紙を何度も書き直し、現在4種類の草稿が残されている。レギーネの夫スレーゲル宛に11月19日に送られた手紙は、21日に未開封のまま返送されてくる。キエルケゴールはこれをスレーゲルがレギーネに無断でしたことと思いこんでいたが、実はレギーネ自身が決断したことであった。

後日キエルケゴールはこう記している。

「彼女の父がなくなった折、スレーゲルに手紙を書いたが、彼は怒って、『だれかが自分と妻の間に入り込むことに寛容になる』ことはできなかった。これによって問題は根本的に決着した。私はこれ以上求めない。しかし問題なのは、おそらく彼女は私のことを知らないだろう。スレーゲルは彼女に語らなかっただろう。」(X 3A769「彼女について」) 彼はレギーネ

が自分の思いに反して自分を拒むことなど考えられなかつたのではないか？

そしてもはや地上での関係修復が不可能であり、「兄と妹の関係」も不可能であると知ったとき、彼にもう一つの可能性が生まれた。それは、この関係を宗教的につくることと、彼女を「永遠に伴う」ことである。この世で結ばれなくとも、自分の著作を通して「永遠の恋人」として人々にそのことを宣言する、こうして彼女を永遠に自分の恋人という位置づけにし、歴史上にその名を刻みつける。これこそスレーゲルには不可能なことであった。次の箇所に注目したい。1949年11月21日の日誌である。

「このことについて私は、軽いとも、幸福とも自由にも感じたわけではない。私自身がこの犠牲的な歩みを踏み出した後、かくも感じ入ったことはない。なぜなら、いまや私は彼女を手放し、彼女の最後の願い『時々は思い出してください』を保つよう注意すること、彼女を歴史と永遠に伴うていくことを神が認めておられることを、今にして理解した。」(X 2A 211)

こうして彼は、彼女に著作を捧げ、永遠に彼女の名をキエルケゴールの元婚約者、永遠の恋人として残すことを書き記し、レギーネを「永遠の恋人」とすることに彼の情熱は傾注されたのである。

このことを、彼は別の箇所でこうも記している。

「神だけがご存知である、その時突然私は、なんとしても彼女に場所を作つてやりたいと思った。神の助けを得て、彼女の記念の場所を。この時代の中で彼女のために作つてやらなければと思った。おお、それは私の誇りをこの上なく満足させるに違ひない。私が得てきた賞賛のことごとく——それを彼女に帰して、賞賛を受けるものとさせること、真実、それこそ私に好ましいものであった。」(X A 540「彼女について」1852年5月)

しかしこうした彼の意図を、彼はレギーネに説明もせず、同意も求めていない。レギーネがキエルケゴールに「永遠と歴史に連れて」いかれたからとは幸福だったとは考えられない。そこに彼女の意志は介在せず、いわば彼の一方的な思いにレギーネが巻き込まれたからである。レギーネはすでにス

レーゲルの妻であるにもかかわらず、またレギーネ自身、キエルケゴールの元婚約者であるよりはスレーゲルの妻であることを重視したにもかかわらず、彼はただ自分の愛を生涯のものとするためにそうした。これをロマンティックの情熱の証と見るか、ストーカーと見るかでキエルケゴールの評価は真二つに分かれる。

3. レギーネはキエルケゴールを愛していたか？

この問いかけは、視点をキエルケゴールからレギーネに移すことである。我々はキエルケゴールがレギーネを愛したことを探わない。だが、レギーネにとってのキエルケゴールとは何ものであったのか。このことに答えるために、まずキエルケゴールにとってレギーネ関係はどのようなものであったかを考えておこう。

レギーネは、キエルケゴールと出会った時は15歳前後の少女であり、彼女に関する様々な証言を見ても、美しく愛らしい善良な少女ではあっても、その時代としては特別の教育を受けたわけでも、また格別の才能をもっていたわけではない、むしろ平凡な女性であった。彼女がキエルケゴールの才能や類まれな精神性と比較できないのは当然である。しかし、この愛を通して、レギーネもまた成長したのではないか？とすれば、むしろ、彼がなぜ愛を成就する方向に向かなかったのか、そこに焦点が絞られてくる。

彼女はキエルケゴールとの婚約破棄の後、スレーゲルとの結婚し、その後生涯にわたってキエルケゴールとたびたび接触はあったが、話は一度もしていない。ただ一度、生涯の別れとなった1855年3月の街頭でのすれ違いざまの挨拶を除いては。スレーゲルとの間に子どもには恵まれなかつたが、幸福な家庭生活を全うしている。そして彼女が、キエルケゴールについて、どのような感情を持っていたかは、周囲の証言から類推するほかはない。

たとえばレギーネは、彼女はキエルケゴールに対し、「あなたを欺瞞者と私を納得させることができるなら、私はすべてを赦しましょう」(IV A 142)と語ったとされる。彼女はキエルケゴールを愛し、受け入れていた。にもか

かわらず彼女にとって理解しがたい婚約破棄に振り回された。キエルケゴールが、彼女が納得できるような説明をしないまま婚約を破棄したことに彼女は傷ついたのである。

彼女は、キエルケゴールの死後、遺産を送るという申し出に対し、夫から辞退の手紙を送り、ただ彼女の手紙といいくつか彼女に属していた小品の返還だけを求めていた⁵。これもまた、彼との関係をこれ以上引きずりたくないという意志の現われと解釈できないか。

さらに彼女は、キエルケゴールが自分に対し真意を打ち明けてくれなかつたという不満を抱いていた。彼のおいのルンへの手紙に、死の直前に彼が婚約破棄の秘密について語ったかどうかを知りたい旨を書き送っている⁶。

そして、彼女自身がキエルケゴールの死後半世紀近くを経て、その思い出を語った女流作家ハンネ・ムーリエによる手記が残されている⁷。(以下EKと略しページ数をカッコ内に記す)

それによれば、この手記は、スレーゲルの死後、彼女がキエルケゴールに対しどのような感情を持っていたか、という質問に対し、「キエルケゴールの生涯は、その宗教的な著作活動と少しも矛盾するものでないことを、人々に理解してもらいたい」という(EK, p.33)彼女自身の願いから語られたものであり、「キエルケゴールがあなた(レギーネ)の愛を悪く利用してあなたを苦しめたとか、また精神的な実験にあなたを供した、というのではけっしてありません。」(ibid.)というふうに、世間のある種の誤解を解くためであったとされる。

レギーネにとって、キエルケゴールとの結婚の可能性は最初は考えられなかった。彼がレアーダム家で彼と初めて会ったのは14歳か16歳の時で、彼の話が魅惑的であったこと、その精神の澁刺さに印象付けられたが、それで決定的に引かれたとか、そういう意味ではない。(EK, p.34)

婚約中、彼女はいつも「宗教的な問題ではいつも聴き手であり、生徒」で

⁵ 大谷長訳編『婚約—セーレン・キエルケゴールの遺稿—』223頁参照(創言社、1972年)

⁶ 同書、225頁参照

⁷ Bruce Kirmmse (ed.), *Encounters with Kierkegaard*, 1996, Princeton University Press

あったといわれる。レギーネは「本当に快活そのもので、いつもそれを無邪気で魅惑的な仕方ではっきりと表して」いた。(EK, p.35)

レギーネは彼の憂愁をどう捉えていたか。「しかし、彼の深い憂愁をあなた（レギーネ）が気づかれるまでには、長くかかりませんでした。そんな時いつも、彼が自分を責め立ててあなたの前で洩らしました事柄は、亡くなつた彼の父と自分との関係でした。あなたのお父様もまた重苦しい気質の方でしたので、キエルケゴルが憂いと自責のあまり、自分自身を失うばかりのとき、こうした彼の精神状態はあなたに少しも疎遠ではありませんでした。ですから数ヶ月が過ぎてのち、彼があなたとの関係で良心の痛みを覚え始めたとき、あなたから離れ去ろうとする彼をそのまま放置でもすれば、きっと彼はそれこそ不幸となり、自責のあまり絶望に陥るとあなたは判断されました。」(EK, p.36)

キエルケゴルは彼女が、自分の婚約破棄を気が狂ったせいだとみなすだろう、また自分の憂愁の気質に彼女は耐えられないと推測していたが、実際には彼女はキエルケゴルをかなり正確に把握していた。

そして語られる。「どうしてもキエルケゴルと結婚したいとする思いは、元々あなたには全く存在しませんでした。」(ibid.)

彼女は当初スレーゲルとの結婚を考えていた。しかしキエルケゴルの強引な求婚に引きずられるように婚約した。無論、婚約者となつたからには、彼女はキエルケゴルに一途な愛と献身を捧げた。にもかかわらず、たとえばキエルケゴルが1849年に書いた『彼女に対する私の関係』を参照すると、キエルケゴルは彼女の献身と従順をむしろ当然のことのように思っていた節が見られる。

そして婚約破棄により、彼女は「少しの苦さも憤りも、また咎めすら彼に対しては覚えず、悲しみと痛みだけ」(ibid.)を感じた。しばらくは彼女が余りにそのことで嘆くので、家族はそれを語るのを止めたほどである。

その後、スレーゲルが求婚したことに対し、彼女は「かつて別の人と婚約していたことを寛大にも許してくれた」(EK, p.37)と、スレーゲルに心からの愛情と賞賛を捧げた。キエルケゴルとの関係にまつわる思い出が、いざ

さかも暗い影を投じることはなかった、という。

しかし、そのような中にキエルケゴールからの和解を求める手紙が届いた。これに対し、レギーネははっきりと自分の意志でそれを拒んだことが語られている⁸。ここで彼女は、自分の良心に従い、最上と思われる通りにした。それはキエルケゴールの元婚約者としてでなく、スレーゲルの妻であることを最優先することであった。

「あの方がご自分と私とに引き起こすこととなりました痛みは、言葉に出来ないほど私には辛く重苦しいものでした。だから生涯にわたって、その痕跡が十分に残りました。確かに私の人生は、平穏ではありませんでした。けれども幸せでした！」(EK, p.39) という言葉で締め括っている。逆にいえば、50年近く経過してなお、このことは彼女の人生の重荷に他ならなかつたということである。

キエルケゴールが日誌の中で「宗教的にできていなかった」(EK, p.35) と評されていることに、彼女は不満を感じていた。それは、彼女が「自分の神関係をことさらに話題とするのは不自然と思われ、人の内奥にある最上のものを話しすぎることがかえってそれを浮薄なものにしてしまう」(ibid.) ことを懸念していたからである。彼女は幼いころはストームギャーゼの、おそらくヘルンフート派の聖会に行き、またトマス・ア・ケンピス『キリストに倣いて』を愛読していた。(ibid.) しかしキルケゴールにとっては、それは直接性の宗教性のレベルに過ぎず、克服されるべき宗教性にほかならなかつた。

キエルケゴールは彼女について、たとえば「私の魂は恐れとおののきのうちに、真のキリスト教を求める——しかし若い、軽薄な、愛らしい少女は、深い印象をもたない。だがキリスト教、だ。彼女は私よりももっと純粹だ」(X 1A 644) と記している。それでは、彼のいう「真のキリスト教」とは一体何なのか。両者の志向する宗教性が異なったにせよ、彼がその食い違いにどう関わったかが問題だが、彼はレギーネを教え導こうとし、レギーネはそれを理解できないまま受容せざるをえない、いわば一方的な関係であったこ

⁸ 大谷長訳「婚約」225頁参照

とは事実である。この宗教性の差異ということが、彼がレギーネと別れた後もレギーネに語りかけるべき主題となり、宗教的著作において繰り返されるテーマとなる。

結論から言えば、レギーネはキエルケゴールを愛していなかった。より正確には、キエルケゴールが望んだ仕方で、望んだ形での愛ではないという意味において。人間的にはレギーネは確かに愛していたといえる。ラファエル・マイヤー (*EK*, p.40) は、レギーネがキエルケゴールに捧げたのはむしろ精神的愛であったと指摘する。しかしその愛は、キエルケゴールとの間では、どうしても理解し合えないものとならざるをえなかつた。

「考えてもごらん、レギーナ、永遠では結婚がないのだよ。そこではスレーゲルも私も、あなたと一緒にいることを喜ぶのだよ」(*EK*, p.42) キエルケゴールはこのように語っていたと伝えられるが、レギーネはスレーゲルよりもキエルケゴールを愛したとの公的な発言を残していない。

そして彼がレギーネとの関係を断念せざるを得なかつたという宗教性とはなんであったのかが問題となってくる。

4. キエルケゴールのいう「宗教的愛」は真に宗教的か？

キエルケゴールは、こうした自分のレギーネへの関係を、信仰によるもの、即ち自己の神関係、宗教性からのものと定義し、かつそれは多くのキエルケゴール研究者によっても支持されてきた⁹。

⁹ 日本を代表するキエルケゴール研究者である橋本淳氏は「愛の不実や背信行為ではなく、彼が自らの神関係にあくまでも忠実であろうとし、宗教的ざんげ者にふさわしく例外者であるべく自分を決心させたからである」(『日誌』第1巻 416 頁) それゆえ、彼は彼女との関係の中に絶えず自分をおき、「守護者」としてその行く末を見守りたいと願い、「兄弟のような関係」となることを願ったと理解する。

また、大谷愛人氏も、「キエルケゴール著作活動の研究〈後編〉」(勁草書房、1991年)において、「レギーネとの関係の問題は、徹頭徹尾信仰の問題であり、神との関係の問題」(101頁) と捉え、レギーネが彼の婚約破棄の原因を「憂鬱」のためとだけ捉えてい

1852年9月10日付けの日記で、彼女と出会い、彼女が自分の人生の第一の優位を占めているのではないかという思いの後、それを否定して、「彼女がやはり私の人生において第一の優位を占めているわけではないということだった。・・・神が第一の優位を占めているのだ。彼女との婚約とその破棄は、本来的には私の神関係であり、あえていえば、神的な意味で神と私との婚約なのだ。」(X 5A 21)と書き残している。すなわち、彼は神関係を第一とした結果、地上でレギーネと結ばれるという願いを断念したと自己を定義している。そしてレギーネに対し、「彼女には、ひとり不幸な愛を秘めて生きていくだけの十分な宗教性がなかった」(IX A 66)としている。これらがその根拠とされている。その宗教性について、彼が述べている箇所を見てみたい。

「ここで私は立ち止まった。著作家である自分の努力を割り引くことが一人のキリスト者として適切かどうか、このような思いに直面した。

『彼女』のことでは、私には何も出来なかった。一つには、関係が攪乱される大きな危険を絶えず懸念せずにいたからである。ま

るのを非難している。(96頁)また、「彼女に対する私の関係」において、「私はかつて神に向かって、彼女を贈り物として、もっともかわいい贈り物として与えられるよう願った。・・・『お前は彼女を手放さなければならない。そのことこそお前の罰である。しかもその罰は、お前がその彼女のあらゆる苦しみをみなければならないことによって厳しさを増し、彼女の哀願と涙とによって、いよいよ厳しいものとなる』(96頁)つまり、神の働きかけによって彼女との関係を断念したことが示唆される。

國井哲義氏もこの見解を踏襲している。(『苦悩と愛—キエルケゴール論』創言社 2002年13頁)「私は、最大の原因是宗教問題、すなわち彼の神信仰にあったと思う。また信仰の問題と結びついて初めて、彼の挙げた〈悔悟者〉〈従前の経歴〉〈憂愁〉などの原因も、重大な、最愛の女性とも別れざるを得ないほども意味を帯びてくると考えられるのである。」そしてその信仰の問題は、「神にとっては一切が可能だという信仰」をもてなかつたこと、つまり「父親の犯した罪、それを背負っている彼の家族、とりわけ彼自身が生贊として神に供される宿命を負っていること、さらには彼自身がその確信を持てないまま、神の許しを見越して結婚に踏み切るとすれば、神を試すことになるであろう。」と考える。(15頁)本質的に、彼は彼女に精神的世界の厳しさで彼女を破壊しないためであり、また自分の精神的世界に踏み入れられないためであるとも指摘する。

た一つには、他の何かを同時に決心することによって、私の著作活動に制限をおこことにもなりかねない行為を、あえてすべきでもなかつたからである。だからもし何かの形で彼女の方から願い出て、公的でまた明確な仕方で私との和解が求められてきたなら、きっとそれは、私の著作活動を手控え制限を置くべきだと告げる摂理の合図として受け止めるに違いないと、自分ではそのように考えて納得した。

ますます私は緊張するようになり、著述することがおろかなことのように思われるばかりか、他方で餓死することこそむしろキリスト教であるとも思われた。そもそもキリスト教とは何であるのか？キリスト教は諸命題の総和でなくて人格的に仕えることではないのか、と。

一年半が経過して今、私の人生一態度は変化し、すべての点で、私が耐えるべきものは何かを悟るようになった。‥(中略)‥

明らかに新約聖書の見解では、永遠の滅びが存在すると告げられる——だから百万人のうちただ一人も救われないかもしれない。その一方、キリスト教界で育ってきた私たちは、誰もが必ず祝福に預かるに違いないと考えて暮らしている。

永遠の滅びを告げるこの見解を受け入れて、私こそ、神の名の下で一切を断念すべきでないのかと、思うときがある。

それを思うとき、私をすくませるものがある。彼女である。その種のキリスト教について、彼女は少しも感知していない。もし私がそれを受け入れ、その通りに歩み出るなら、私たちの間に宗教の相違が生じてくる。」(X 5A 146)

1853年のこの文章は、彼が『キリスト教の修練』を出版すべきか否かを悩んでいた時、それを決意したいきさつに触れたものだが、そこで彼が志向したキリスト教は、神の裁きと「永遠の滅び」の前に立ち止まるものであり、おそらくレギーネの想像を超えるものであった。無論その峻厳なキリスト教は、同時に彼の中で神の恩寵の道であったが、その二重性を理解することをレギーネに求めることは不可能であると判断した。その意味で彼は、自らを

孤独な戦いへと至らしめる信仰の道に立たずにはおれない単独者であったし、橋本氏が言うように、「宗教的ざんげ者にふさわしく例外者であるべく自分を決心させた」といえるだろう。その意味では、彼女をこうした困難な孤独な道に引きずり込むことを潔しとしなかったのは、むしろ彼の思いやりといえるかもしれない。

だが、あえて言うなら、それは愛にふさわしい自由を生み出す宗教性、他者の徳を立て、その人を自らキリスト者となるように助けるものであろうか。これは、『愛のわざ』に見られる宗教性であるが、ことレギーネ関係を見る限り、それを現実化する手立てを彼は持っていたと思われる。

彼はレギーネを自由にしただろうか？ ジュリア・ワトキンが指摘するように、神の創造は、自分自身を無にし被造物に自由を与えることであった。自分自身はあたかもないもののように、まるでその人自身が何の負い目もないかのように自由にするのが神の創造の愛の秘儀である¹⁰。しかし彼は、レギーネに対しては、そうした彼の宗教性を示し、彼女に理解を求めた上で、彼女を自由にすべきだったのに、そうしなかった。むしろ彼女の中にある意志、愛、自由を自分の記念碑とするために束縛したのではないか。

レギーネにとって、彼女が自分を見出したのは、スレーゲルの愛によってであった。キエルケゴールは彼女にとって理解をこえていた。しかしどうしてスレーゲルの誠実は彼女に理解しうるものであり、レギーネはキエルケゴールとはなれたことによって、初めて自分らしい愛し方を見出したのではないか。確かにレギーネも、キエルケゴールとの最初の婚約の時点では、結婚に憧れる若い娘で、彼との結婚が実際にどんな精神的影響を及ぼすものかは考えられなかつたであろう。しかしどうしてスレーゲルとの結婚を通して、彼女は自分を自覚し、キエルケゴールから離れた一個人として成熟することができた。そこでは、あえて「兄妹の関係」などとしゃちこばらずとも、一人の人間として共感し、理解することができたのではないか。たとえキエルケゴールの憂愁や

¹⁰ Julia Watkin, 'The Logic of Søren Kierkegaard's Misogyny, 1854-1855' p.69-70 (*Feminist Interpretation of Søren Kierkegaard*, Pennsylvania University Press 1997) 所収

精神が理解できずとも一そもそも同時代に理解できた人間が、男でも女でもどれほどいたといえるだろうか—、彼女は彼女として、キエルケゴールを理解し、また愛していた。

しかしキエルケゴールにとっては、レギーネはいつまでも「私の小さいレギーネ」と呼ばれる存在でしかなかった。なるほど、レギーネは彼より10歳下であり、出会ったときは少女にすぎなかつた。しかしレギーネが30歳を越え、人妻として立派に生きているときにも、彼にとっては「小さいレギーネ」でしかなかつた。つまり庇護や指導の対象ではあっても、対等の関係でレギーネに共感し、レギーネから学び、彼女とともに成長していくことは考えられなかつたに違いない。レギーネが自分の意志をもって自分を主張することを理解できなかつた。

彼は不幸な愛と称する。自分自身を理解されないことだけでなく、彼女を傷つけないために「悪党」を演じ、残酷に振舞わねばならないこと、本当はだれよりも愛しているのに、彼女にそれを知らせてはならないことであるというなら、この「不幸」の本質は一体なんであろうか？

彼は告白する。「私の罪は、神にはすべてが可能だという信仰を持たなかつたことである‥(中略)しかし私の罪は、彼女を愛さなかつたことでは決してない。もし彼女が私にかくまで献身し信頼してなかつたら、彼女自身のために生きることをやめなかつたら——その時にはすべてがつまらないことになつていただろう」(III A 166) そう、彼は自己のその閉鎖性、他者には理解不可能と思われる精神性が、レギーネとの結婚によって、たとえ理解できなかろうと、受け入れられ、交流が起こるうちに、他者との関係によってあらたな実存の可能性が開かれるということを信じなかつた。彼の求める宗教性は、そうした内閉性をさらに深める形でしか展開されなかつた。

こうした彼のレギーネへの意識の根底には、単なる保守的キリスト教の倫理のみならず、当時のロマンティックの潮流の影響が強く見られるといえよう。ロマンティックの特徴として、自然の重視、感情の重視、男女の差異の極大化があげられる。男性・女性はそれぞれに相反する性質を持ち、男性は理性、精神を代表し、女性は感情、肉体を代表する。女性には決定的な意味

で男性とは異なる知性がある。それゆえ男性は自分と異なる原理である女性に「永遠の女性」像としての憧れを持ち、崇拜し、その関係を理想化する。彼が終生結婚せず人妻となったレギーネを純粋に愛し続けたのはその典型と見なされる。

一方、保守的なキリスト教においては、女性は男性に従属するのは自然なこととみなされる。男性は女性を庇護し指導的するという父権的立場に立っている。

憧れと支配、この両義的な感情が彼のレギーネへの思いの特徴である。彼はレギーネに愛すべき直接性であることを求めると同時に成熟した宗教性を彼女が持っていないことを非難する。しかしこれは、きわめてアンビバレントな要求である。だが宗教性の成熟を求めれば、彼女のもつ直接性が損なわれ、自分を魅了してきた彼女の純粋な献身まで損なわれるよう思ったのではないか。実際に、大人の複雑さを受け入れること、キエルケゴールの場合でいえば、彼の二重性や内面の複雑さを理解できないことを嘆きながらも、もし実際彼女がそうした複雑さを理解して行動していれば、彼自身が耐えられなかつたのではないか。より正確には、彼はレギーネと対等の恋愛関係を望んだのではなく、宗教性の名のもとに、パターナリストイックかつデモニッシュな愛を持とうとしただけではないか。

ここに、キエルケゴールの宗教性の名の下に隠された、彼の人間的弱さを見ることはできないだろうか。

結論 キエルケゴールは空想のレギーネに永遠の愛を誓うために、生身のレギーネを踏みにじった。レギーネはそれに対し、沈黙して自らの立場を守った。

レギーネは沈黙せざるを得なかった。それが彼女がキエルケゴールから学んだ、否、キエルケゴールと関わることによって、自己を省み、夫スレーゲルを選んだことを全うしなければならなくなつた。キエルケゴールはいみじ

くも、ゲーテの恋人フリーデリケの例を挙げているが、実際、レギーネは、スレーゲルの愛を全うすることで、キエルケゴールの永遠となった。

確かにキエルケゴールには、愛する側の論理だけであり、愛される側の論理がない。そしてキリスト教的な父長的意識といい、ロマン主義的な愛の賛美といい、それは時代的な制約を免れ得なかった。

しかし、キエルケゴールはそのなかから、自己を宗教的著作家として受け取りなおし、宗教的使命觀に基づく行為としてレギーネへの愛を昇華し、愛を宗教的に位置づけようとした。その真摯さは認めざるをえない。彼女を所有したいという思い、彼女に認められたいという思い、こうした人間的な弱さを持つつ、彼はレギーネへの愛を神への愛に向け、文字通り犠牲となつたのである。

この小論は、平成15~17年度日本学術振興会「科学研究費補助金(C)(2)」「現代キリスト教における女性観」による調査研究に基づき、2003年11月キエルケゴール協会秋季例会にて発表された原稿を加筆訂正したものである。

(もりたみめ・大阪キリスト教短期大学)

キエルケゴールにおける歌劇受容について

米沢一孝

はじめに

セーレン・キエルケゴール Søren Kierkegaard 1813-55^{•1}が「これか一あれか Enten-Eller」第一部収録の論文「直接的、エロス的な諸段階、あるいは音楽的—エロス的なるもの De umiddelbare erotiske Stadier eller det Musikalsk-Erotiske (以下、「ドン=ジュアン論」とする)」において、モーツアルト Wolfgang Amadeus Mozart 1756-91 の歌劇「ドン=ジョヴァンニ Don Giovanni」について論じたことは周知である。しかし、この論文は、他のキエルケゴールの著作同様、容易な理解を許さぬ。論の中心となるのはモーツアルトの歌劇『ドン=ジョヴァンニ』解釈である。だが、「恋愛の告白」かのようなモーツアルト賛美があるかと思えば、芸術における素材と形式の問題、媒体としての芸術による理念伝達の問題、芸術とキリスト教との関係など、実に多くの論点を見出すことが可能な論文である。

まして、問題を錯綜させるのが、この論文が匿名作家の手のものという事実である。確かに「ドン=ジュアン論」の作者はキエルケゴール本人と同一視されではならない。「これか一あれか」の刊行者を名乗るヴィクトール・エレミタが、作者をAとする以上、「ドン=ジュアン論」は審美家Aの論考である、とするのが無難である。とはいえ、「ドン=ジュアン論」それ自体にキエルケゴール思想の核心がないのだろうか。当論文はその問題に解答を与えるものではないが、少なくとも彼の「伝達」の問題を考慮する上で、「ド

^{•1} 引用文件の「キルケゴール」は、混乱を避けるため、すべて「キエルケゴール」で統一する。また同様に、人名「ドン・ジュアン」などはすべて「ドン=ジュアン」に統一する。今回「ドン=ジュアン論」引用に用いるテキストは『セーレン=キルケゴール著作集』Søren Kierkegaards skrifter / udgivet af Søren Kierkegaard Forskningscenteret, Gads, København, 1997-. のうち Bind2 Enten - Eller Første del, 1997. である。本文中における(SKS.2 64.)とはセーレン=キルケゴール著作集第 2 卷 p.64 という意味である。